

戦国大名浅井三代と三姉妹

長浜市 市民協働部
学芸専門監 太田 浩司

1 戦国大名浅井三代

- *大永3年(1523)、大吉寺梅本坊の公事以降、京極氏臣団内の盟主として台頭。もともとは、浅井郡丁野(長浜市小谷丁野町)の国衆。
- *天文3年(1534)、京極氏を小谷城で饗応した時までには、湖北支配の実権を掌握する。その居城は、小谷城で国指定史跡となっている。
- *亮政・久政・長政の三代、50年の歴史がある。元亀4年(=天正元年、1573)9月1日に、織田信長によって攻められ、長政が自刃して滅亡する。
- *浅井亮政の時代は南の六角氏の攻勢に悩ませられる。久政の時代には六角氏に臣従した。長政の時代に織田信長と同盟し最大勢力を保った。しかし、元亀争乱で4年間にわたって信長と戦い滅亡する。
- *関連する遺跡は姉川古戦場や、横山城・山本山城などの支城群。あるいは、下坂氏館跡や三田村氏館跡など(国指定史跡 北近江城館跡群)など家臣団の屋敷跡も関連する。
- *浅井氏の菩提寺は、長浜市平方町にある徳勝寺(もとは小谷城清水谷にあった)で、現在も浅井氏3代の墓がある。
- *京都市東山区の養源院は、文禄3年(1594)、長政21回忌に際して淀が建立した浅井長政の菩提寺である。さらに、元和5年(1619)に火災に見舞われたが、江によって再興された。当初の住職は浅井氏一族である。

2 母・市の前半生

- *天文16年(1547)の生まれ。長政の2歳の年下。
- *信長妹だが、『以貴小伝』には「諸書にしるす所、みな妹といふ、然るに溪心院といふ女房の消息をみしに、信長の「いとこ」なりといふ、もしハいとこにておハせしを、妹と披露して長政卿にをくられしにや」と、信長「いとこ」説を載せるが俗説。
- *浅井長政へ嫁入りは、通説では永禄10年(1567)～永禄11(1568)、お市21・22歳。この場合、織田・浅井は近国同盟説。大河ドラマ「江～姫たち

の戦国～」は、永禄 11 年 4 月（22 歳）説で放映。

- * 太田は永禄 4 年（1561）説、お市 15 歳。この場合、織田・浅井は遠交近攻説。
- * 長政とお市の日常生活の場所。清水谷＝「御屋敷」か、小谷山上の「大広間」か不明。
- * 『寛政重修諸家譜（かんせい・ちょうしゅう・しょかふ）』浅井系図は、浅井長政と市の間には、三姉妹の他に万福丸（まんぷくまる、長男）と、万寿丸（まんぎくまる、万菊丸とも、次男）を記す。万福丸は、小谷落城時 10 歳、永禄 7 年（1564）の生まれ。

3 母・市の後半生

- * 小谷落城に際して、浅井長政の許（もと）からお市と三姉妹が脱出した。
- * 最初は信長の弟・信包（のぶかね）が城主であった伊勢国上野城（または安濃津城）、やがては尾張国清洲城へ移されたというのが通説。
- * 浅井郡平塚村（長浜市平塚町）の実宰院（じっさいいん）で、浅井長政の姉・実宰院昌安見久尼（しょうあん・けんきゅうに）に、市と三姉妹はかくまわれたという説。見久尼は身の丈 5 尺 8 寸（175cm）、目方 28 貫（105kg）の巨体であったという。
- * 慶長 2 年（1597）5 月 1 日の豊臣家四奉行連署状、長束正家・増田長盛・浅野長政・前田玄以の四奉行が連署して、実宰庵（当寺は院号は持っていなかった）の跡目については、現在の住持尼の望み次第とすることを、秀吉の許可を得た上で伝えたものである。宛名は長政の次女・常高院（初）の夫である京極高次。
- * お市は天正 10 年（1582）の清洲会議後に、信長三男の信孝の斡旋（あっせん）により、柴田勝家と再婚。
- * 天正 11 年（1583）4 月 21 日、夫の柴田勝家が賤ヶ岳合戦で敗れ、4 月 24 日には天守閣に火をかけ勝家と共に自刃（じじん）、37 歳。

4 長女・茶々 ちゃちゃ（淀 よど）

- * 市と長政の長女・淀は、名は茶々。『翁草（おきなぐさ）』によれば、永禄 10 年（1567）の生まれとされる（49 歳没）。しかし、最近では井上安代氏・福田千鶴氏によって、永禄 12 年（1569）生まれとする説が有力となっている（47 歳没）。
- * 淀が秀吉の側室になったのは、天正 16 年（1588）頃か。詳細は不明。

- *天正 17 年(1589)5 月 27 日、第一子の鶴松を淀城で産んだ。天正 19 年(1591) 8 月 5 日に病没してしまう。わずか 3 歳であった。
- *淀は文禄 2 年(1593) 8 月 3 日、第二子にあたる秀頼を大坂城で出生する。
- *文禄 4 年(1595) 7 月、秀吉は秀次を高野山へ追放し、同 15 日には切腹を命じた。
- *慶長 3 年(1598) 8 月 18 日、秀吉が病没する。
- *関ヶ原合戦の時、淀は秀吉の正室おねと協力して、西軍(石田三成側)によって攻められた大津城に身を寄せる松の丸(京極龍子)の救出に尽力。
- *慶長 8 年(1603)、徳川秀忠と妹江(ごう)の間に生まれた長女・千姫を、秀頼の妻として迎える。
- *慶長 16 年(1611) 3 月 28 日、家康と秀頼が二条城で会見する。
- *慶長 19 年(1614)には大坂冬の陣、翌年、大坂夏の陣で 5 月 8 日に秀頼と共に自害。

5 長女・茶々(淀)の人物像

- *豊臣家を滅亡に追い込んだ悪女としてのイメージ。その最たるものは淀殿不倫(ふりん)説。大野治長・名古屋山三郎との噂(うわさ)。「淀君」も蔑(さげす)んだ言い方。
- *淀は事実上の大坂城の主として男勝りの活躍。しかし、内面は不明。
- *天正 18 年(1590) 4 月 13 日、秀吉が正室おねの侍女「五さ」に送った書状には、淀殿を小田原陣中に呼ぶよう命じると共に、おねに続き自分の気に入る女性は淀であると明言。
- *『多聞院日記』や『看羊録』によれば、慶長 4 年(1599) 9 月、秀吉の遺言通り、家康と淀との結婚が計画されたが、大野治長は淀に通じていたので高野山に駆け落ちしたの情報が流れる(北川央氏による)。
- *『太閤さま軍記のうち』にある秀吉醍醐花見(慶長 3 年(1598) 3 月)の興順 ①正室の北政所(おね) ②淀 ③松の丸殿(京極龍子) ④三の丸(織田信長娘) ⑤加賀殿(前田利家娘)
- *信長妹(お市)と浅井長政との間に生まれた長女という「貴種」に生まれた悲劇。

6 次女・初 はつ(常高院 じょうこういん)

- *常高院は三姉妹の次女、元亀元年(1570)の生まれ、名は初。
- *天正 15 年(1587)頃、北近江守護家の流れを汲む京極高次の妻となる。

- *京極高次の母・マリア（養福院）は浅井長政の姉で、晩年舞鶴市字泉源寺の「此御堂（こみどう）」に晩年隠棲したという。同所智性院には、「此御堂」の遺物が伝わる。マリアの夫（高次の父）・高吉もキリシタンであった。
- *夫・高次は、天正 15 年（1587）に近江国高島郡大溝城主、天正 19 年（1591）に近江八幡城主、文禄 4 年（1595）に大津城主、そして関ヶ原合戦後に若狭國小浜城主となる。
- *慶長 11 年（1606）7 月、妹江の四女・初姫を京極氏の継嗣・忠高の妻として迎える。高次が侍女・於崎に生ませた忠高について、初が嫉妬し殺害しようとしたとする説（高島・磯野家由緒書）。
- *夫・京極高次は慶長 14 年（1609）5 月 3 日、47 歳没。
- *大坂の陣では、徳川方と豊臣方をつなぐ使者として活躍した。
- *『お菊物語』 大坂城外に脱出した常高院の言葉「女の事なれども、城中にをり申たるもの、いかやうに仰せつけらるべきもしれず候へば、随分よろしく申べく候へども、兎角（とかく）御下知ハそむかれぞ、覚悟し給へ」。これを聞いて付き従っていた女性是一同悲しんだが、やがて常高院が戻ると、興から出ない内から、「事すみ候て、何れもみなのだみ次第いづかたへも、おくりつかはすべきよし」と家康の意向を伝えたので、一同喜んだという。
- *常高院は晩年、江戸で生活。寛永 10 年（1633）8 月 27 日、64 歳没。墓は小浜常高寺にある。
- *常高院が亡くなった際、仕えた侍女たちは尼となり、小浜に七つの尼寺を建立しその菩提を弔った。その尼寺は常高院の法名にちなみ榮昌院と総称された。常高院の墓に對面して、この名七人の侍女たちの墓も並んでいる。
- *死ぬ 1 ヶ月程前に書かれた遺言状の写が現存する。日付は 7 月 21 日付けで 11 ヶ条、夫の高次の跡継・忠高（高次の側室於崎の子）に宛てる。常高寺を京極家として大切にするように述べ、常高院に仕えた侍女や小姓・用人らの生活や行く末を頼んでいる。彼女の賢く優しい人柄を偲ばせる。

7 三女・江 こう（崇源院 すうげんいん）

- *天正元年（1573）、浅井長政と市（信長妹）との間に生まれた浅井三姉妹の末娘（三女）。小谷城で生まれた。名（幼名・通称）は、江（こう）、あるいは督（ごう）が正しい。自筆消息（榮昌院文書）には「五」と署名する。「江与（えど）の方」は「北方」・「御台所」などと同じく号。諱（いみな）は、達子（みちこ）であるが、これは死後に従一位を贈位されるに当たってつけられたもの。崇源院（すうげんいん・そうげんいん）は諡号である。
- *最初尾張国大野城（愛知県常滑市所在）の城主佐治一成（かずなり）に嫁入

り。12歳。天正12年(1584)の初めか。「佐治は予(自分)の相婿(妻が兄弟)には不足なり」と秀吉に言われ離縁。

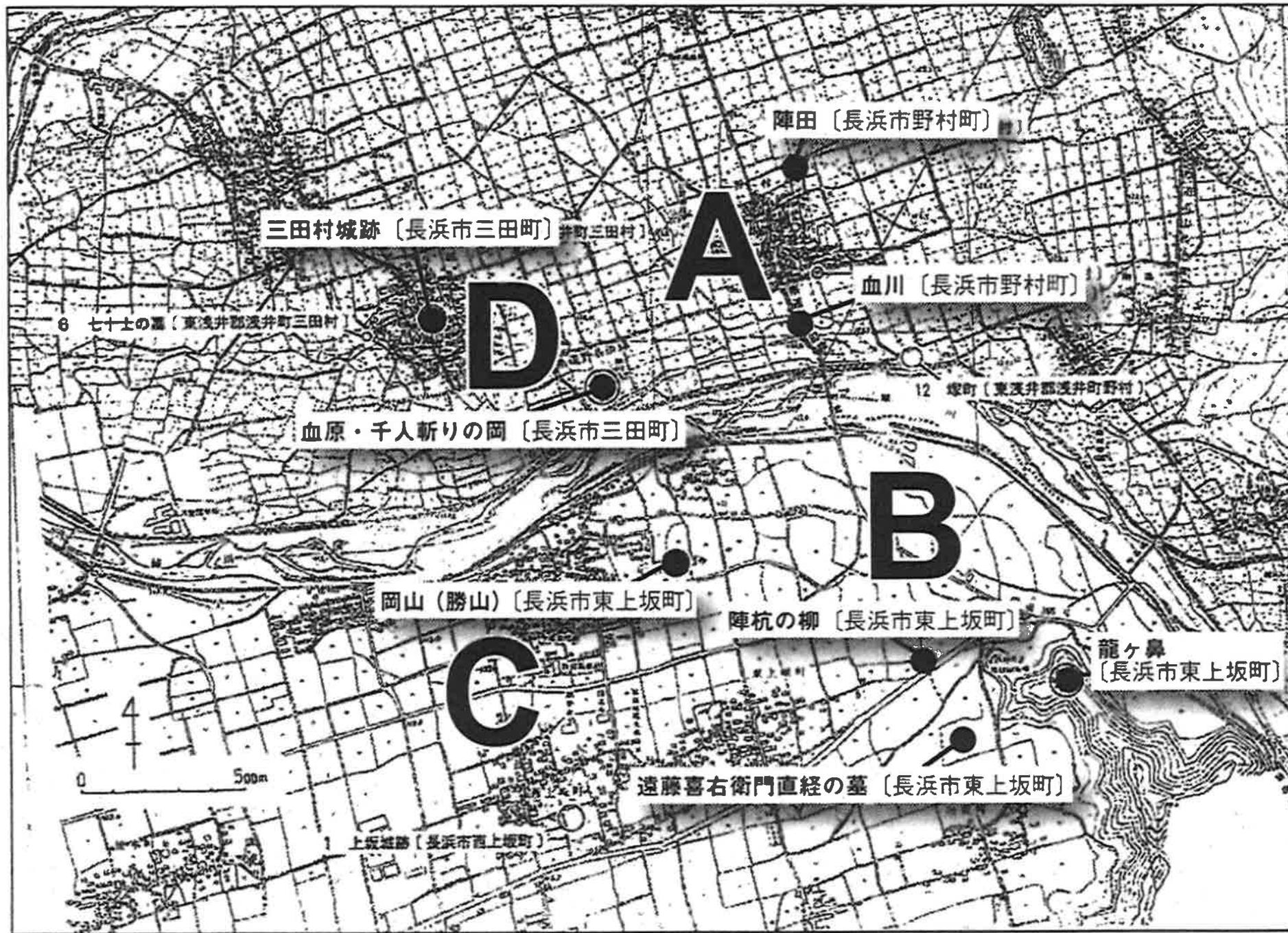
- * 文禄元年(1592)2月、江は岐阜城主・羽柴小吉秀勝(豊臣秀次の弟)の妻となる。20歳。秀勝は同年9月9日に朝鮮出兵途中で病死。秀勝は、天正14年(1586)から於次秀勝(前年12月10日に、18歳で死去)の跡を継いで、丹波亀山城主10万石となっている。
- * 文禄4年(1595)9月17日、23歳にして、秀吉の養女となり6歳年下の徳川秀忠の妻となる。秀忠との間には、二男五女を産む。
- * 『徳川系譜 公子譜』によれば、次男 竹千代(後の三代将軍家光)、三男 国松(後の駿河大納言忠長)とされるが、一般的には長男・次男と考えられている。
- * 『徳川系譜 公子譜』によれば、長女 千姫(豊臣秀頼の妻)、次女 珠姫(たまひめ、前田利常の妻、子々姫とも)、三女 勝姫(越前福井藩主松平忠直の妻)、四女 初姫(京極高次の継嗣・忠高の妻)、五女 和子(まさこ、後水尾天皇中宮、東福門院)、和子は明正天皇(奈良時代以来の女帝であった)を生み天皇家にも浅井家の血筋を残す。
- * 慶長4年(1599)12月、伏見城から江戸城へ移る。没するまで江戸を拠点とする。
- * 慶長17年(1612)2月25日、徳川家康は江に手紙を送り、徳川家の家督はあくまでも竹千代に渡すので、国松については、それを補佐する人物として育てるよう説く。竹千代の乳母・春日局の手配。
- * 寛永3年(1626)9月15日、江戸城において54歳で没。江戸芝増上寺に葬られ、同年11月28日に従一位を追贈された。

まとめ

浅井氏は織田信長と4年間にわたり戦ったことで、その名が世間に知れ渡ったが、三姉妹が江戸時代初期に活躍することで、さらに日本の歴史に大きな影響を与えた。戦国大名浅井氏は、「滅亡してからも繁栄した一族」と言える。その姿は、系図を見れば明らか。

浅井氏関連年表

永正2 (1505)		箕浦庄日光寺で、京極高濂と京極政経の講和が成立する。京極高濂-上坂家信政権の安定。
大永元 (1521)		上坂家信、没。子の信光が相続する。
大永3 (1523)		<u>大吉寺梅本坊の公事</u> (京極高広と高慶の対立) が起きる。浅見貞則が湖北政治の実権を握る。
大永5 (1525)頃		浅井亮政、京極高濂・高広を、完成間もない小谷城へ迎える。
大永5 (1525)	5~9	六角氏、湖北に侵入する。京極親子・亮政、湖北を脱出する。
享禄元 (1528)	8	内保河原の合戦 (京極高広と高慶の対立)
享禄4 (1531)	4	箕浦河原の合戦 (六角定頼勝利、浅井亮政敗北)
天文2 (1533)	正	浅井亮政、今井秀信を神照寺で謀殺する。
天文3 (1534)	8. 20	<u>浅井亮政、京極親子を小谷城清水谷にでもてなす。</u>
天文4 (1535)	正~	多賀貞隆の乱、六角軍が「境目」に進出し合戦となる。
天文7 (1535)	春	京極高濂、没。
天文7 (1538)	5~9	六角軍が「境目」に進出、国友河原の合戦。小谷城下は焼かれ亮政も城を退去する。
天文11 (1542)	正	<u>浅井亮政、没。久政家督相続。</u>
弘治2 (1556)		浅井軍、六角氏による伊勢遠征に従軍。
	~弘治3 (1557)	
永禄2 (1559)	正	浅井賢政 (後の長政) が元服、平井定武女を妻として迎える。
永禄3 (1560)	8	浅井軍、愛知郡野良田 (彦根市内) で六角氏と戦い勝利する。
永禄3 (1560)	10	<u>浅井賢政、家督相続 (浅井久政引退)。</u>
永禄4 (1561)	5頃	浅井賢政、長政と改名する。同じ頃、織田信長の妹お市を妻として迎える (浅井-織田同盟の成立、但し永禄7年説・永禄10~11年説あり)。
永禄6 (1563)	10	浅井長政、観音寺騒動による六角領国の混乱により、愛知川まで南下する。
永禄11 (1568)	2	浅井長政、甲賀山中氏と同盟を結ぶ。
永禄11 (1568)	11	浅井長政、高島朽木氏に所領保全を約す。
元亀元 (1570)	4	<u>浅井長政、織田信長の越前朝倉氏攻めに当って、信長に背く。</u>
元亀元 (1570)	6	織田信長、湖北に侵攻する。堀・樋口氏、浅井氏を背く。
元亀元 (1570)	6. 28	姉川合戦
元亀元 (1570)	9~12	志賀の陣 (浅井・朝倉氏、比叡山上まで南下し信長と戦う)
元亀2 (1571)	2. 24	佐和山城開城
元亀2 (1571)	5. 6	木下秀吉らの軍、鎌刃城を救援し、浅井軍・一向一揆の軍を下坂の「さいかち浜」で殲滅させる。
元亀2 (1571)	8	織田信長、小谷城を攻め、木之本・余呉を焼く。
元亀3 (1572)	正	織田信長、姉川と朝妻の間の往還を封鎖する。
元亀3 (1572)	3	織田信長、小谷城を攻め、木之本・余呉を焼く。
元亀3 (1572)	6	織田信長、虎御前山に本陣を置く。
天正元 (1573)	8. 20	朝倉義景、一乗谷から大野に逃れ自刃する (朝倉氏の滅亡)。
天正元 (1573)	8末	織田信長、小谷城に総攻撃をかける。
天正元 (1573)	9. 1	前日の浅井久政 (49歳) に続き、 <u>長政 (29歳) が小谷城で自刃する (浅井氏の滅亡)。</u>



姉川合戦場付近の史跡